

野研びより

爬虫類編 1号

野外生物生態調査研究部 昆虫班

2015年10月



図1. ニホンマムシ *Gloydius bomhoffi*
ヘビ亜目 クサリヘビ科¹⁾

皆さんはマムシという蛇をご存じだろうか。マムシというのは北海道から九州にかけて生息するニホンマムシのことだ。おそらく、多くの人が「知っている」と答えることだろう。しかし、ニホンマムシの詳しい特徴や生態は知らない人も多いのではないだろうか。日本人にとってマムシは毒蛇の代表格ともいえ、中には蛇を見つけただけでニホンマムシだ、と勘違いする人もいる。

では実際にはニホンマムシはどのような特徴を持つのだろうか。

もっとも有名なのは毒を持つことだろう。^{1) 2)} ニホンマムシの毒は複数の酵素たんぱく質によってなるが、それらが

もたらすのは多量の出血と身体のマヒである。咬まれると灼熱のような激痛を感じ、毒に含まれる複数の酵素が血圧の低下、溶血、咬傷部周辺の筋組織の変質、血液凝固の阻害を引き起こす。これにより咬傷部は腫脹が発現し症状の悪化に伴って腫脹の変色、水疱の発生、患部の感覚のマヒ、筋肉の壊死などがおこり、場合によっては換気障害や急性腎不全により死に至る。しかし、ニホンマムシが咬むことによって注入する毒液は他の毒蛇よりも少量であるためすぐに病院にいけば大事に至らないことも多く、咬まれることによる死亡事故の件数はすくない。

ニホンマムシはその形態も有名である。頭部が三角形であり、尻尾は短く、体長に比して胴の直径が太いためほかの蛇と比較すると寸胴な印象を与える。独特なまだら模様を持つことが多いが、体色が真黒な黒化型と呼ばれる個体も存在し、加えて幼蛇は尾部が黄色い。地域による個体差が大きく、北海道では大型の個体が多く確認され、伊豆大島の個体は赤みの強い体色をしている。また、ニホンマムシの瞳は縦に長く、大きい。マムシの頭部は三角形であるという点については先ほど触れたが、これは同定の際にはあまり参考にならないことが多い。というのもアオダイショウやシマヘビといったほかの蛇も、興奮すると頭を三角形に広げて威嚇を行うからである。

ニホンマムシはピット器官をもっており、赤外線を感知することができる（ピット器官を持つのはクサリヘビ科マムシ亜科とボア科ボア亜科、ニシキヘビ科であり、日本に生息している蛇のなかではニホンマムシ、ツシママムシ、ホンハブ、ヒメハブ、サキシマハブ、トカラハブ、台湾ハブである）。本種がピット器官をもつことは、生態と深くかかわっている。彼らは夜行性であり、昼間は草むらや物陰に隠れていることが多い。エサは小型の哺乳類（ネズミなど）、小型の

爬虫類（トカゲなど）・両生類を捕食する。赤外線を感じできるピット器官は、暗闇の中でも獲物を捕まえるために重要な役割を果たしている。

生殖様式は卵胎性であり、卵を体内で育て、子を産む。夏に交尾を行い、次の年の8月から10月にかけて5から15匹の子を産む。普段は気性が穏やかで見つかっても不用意に近づこうとしなければ咬もうとはしないが、妊娠中の雌は（どの生物にも言えることであるが）気性が荒くなっており、激しい威嚇に加えていつもより積極的に咬もうとするため更なる注意が必要となる。



木花フィールドでもニホンマムシは確認されており、先日轢かれたと思われる個体を発見した。今は10月。気性が荒くなっている時期である。見つけても不用意に近づかずそっと離れるのがいいだろう。

図2. 木花フィールドにて轢死したと思われる個体

引用文献

- 1) 内山りゅう 他 (2002)、『決定版 日本の両生爬虫類』、平凡社、pp.310-311
- 2) ニホンマムシ - Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8B%E3%83%9B%E3%83%B3%E3%83%9E%E3%83%A0%E3%82%B7>